

わからないねえ。あんたが持つてる小鳥が、死んでいるのか、生きているのか、わからないねえ。でもはっきりしているのはね、それがあんたの手の中にあるということ。あんたの手中にあるってことだよ。

—— トニ・モリスン

「何で私がそんなことしなくちゃいけないんですか！」
話をひと通り聞き終えたスズネ・Oが発したのは、そんな一言だった。

しかし、それも想定の内だったのか、長官官房付審議官であるカスミ・Mは動じることなくここにこご笑っている。

「そう言わないで。これは、あなたにとっても良い話でもあると思うのよ」

「どっ……どこがですか」
返すスズネの声は、カスミと対照的に、自然と大きなものになってしまふ。

「出世の切欠に、なるかもしれない」

机の上で組んだ両手の上に顎を乗せたカスミは、悠々と言い放った。しかしスズネが頷くことはなく、それどころかキャリアアの上司の前であるということも忘れて、鼻で笑ってしまう。

「出世？ バカなことを言わないでください。ノンキャリアの出世なんて、せいぜい課長止まりでしょう。そのノンキャリアの限界である課長になったって、自分の子どものような年齢のキャリアアにいいようにこき使われて、ときには使われることさえなくゴミ扱いはされる

のが関の山です。ノンキャリアとして官僚になってしまった時点で、出世なんて夢は粉々に打ち砕かれてるんですよ」

キャリア組であるカスミにこの態度はどうかと思わないでもなかったが、しかし、今は内容が内容だ。それに、ノンキャリアの自分がキャリアアに媚を売ったとて、出世できるわけでもない。だから、どうでもいい。入省して二年と数カ月、スズネの中には、すっかり諦念のようなものがあがっていた。カスミ審議官とて、どうせ、自分を人間扱いしていかないのだ。

「じゃあ、なぜ官僚になろうと思ったの？」

「それは、……」
言葉に詰まる。

国政に携わりたいと思った。国を変えたいと思った。自分の能力を生かしたいと思った。

しかし、国家一種を受けて合格したとしても、出身大学が国立大学のトップであるT大学でなければ意味はない。もちろんそれ以外の大学からも合格者はいるけれど、どこかの省庁に入れたとして、その後待っているのは『宇宙人扱い』だった。T大出身ではないくせにキャリアという意味不明な奴として遠巻きに扱われ、トップである事務次官になれることなど決してなかった。

それならば、事務方として堅実に働いた方がまだ意義があるはずだ、と、スズネは国家公務員二種試験を受験し、そして合格した。

しかし、採用された文化・教育省に入省したスズネを待っていたのは、キャリアとノンキャリアの間にある、絶望的なまでに高く、そして分厚い壁の存在だった。

華々しい出世コースを歩み、事務次官になれるのはキャリアのみだということくらい、わかっていた。それでもノンキャリアにしかできない仕事はある、自分だって国を支える一員になることができ